

比較文化会報

Dec. 1992 No.13

本部事務局 青森県弘前市稔町13-1
弘前学院大学英米文学佐藤研究室
電話 (0172) 34-5211 内線216

発行者 芳賀 馨
編集者 楠 純一

「日本の西のはずれの長崎へ」

第15回全国大会へのおさそい

九州支部副支部長 南川 啓一

長崎の地に赴任して十二年目の夏を迎えた。こちらに来て気になったのは、「日本の西のはずれの……」という「長崎」にいつもくっつく修飾語句であった。

最初はこれを長崎人の謙遜であると思っていたのだが、実は本当にそう思っていたのではないかと考え始めた時、「日本の近代文明の発祥の地……」とか、「西洋文明への窓口であった……」とか、「異文化の交差点であった……」という修飾語句を「長崎」に付けることになった。

こんなよそ者もいつのまにか「長崎人」になってしまった。長崎人になったと気付いたよそ者は、「やっぱり、長崎は日本の西のはずれだ」と思うようになった。そして、「西のはずれの長崎は西洋文明への窓口であり、日本の近代文明の発祥の地である異文化の交差点であった」と考えるのである。

長崎は古くは遣唐使が旅立ったルートのひとつであり、また、同時に多くの華僑を迎えた地でもあった。華僑がもたらした中国の文化は様々なかたちで長崎人の生活に根づいていった。長崎で行われる祭りには中国文化の影響が濃く、この地にある寺のいくつかは古くは中国寺であったとも言われている。食文化も大きな影響を受けた。「ちゃんぽん」や

「角煮」等長崎庶民の味は中国ルーツである。「素麺」も実は中国から長崎経由で日本へ入って来たとも言われている。

また、オランダの影響を受けるようになってからは「しっぽく料理」という「中・蘭・日」の三文化ミックス料理を生み出した。対馬では昔から韓国との間で「漁民貿易」が行われており、方言の中には韓国語の名残が見受けられる。キリスト教伝来後の長い禁令の間には「隠れキリシタン」という独特のキリスト教文化をも生み出した。この間様々なかたちで信仰を守り通したこれらの人々は「隠れる」必要のない今日でさえも、その独特の「隠れキリシタン」としての文化を継承している。

古くから、長崎人は異文化を排斥することなくうまく取り込んできた。かたより実利を重んじたのかも知れない。目新しいものを好んだのかも知れない。

日本比較文化学会に、遅ればせながら九州支部を加えて頂いた。その支部を長崎に置くことは「長崎人」にとっては誇りでありまた「異文化の交差点」であった長崎の面目躍如としたところである。長崎には在野の郷土史家が多いし、また、史談会や郷土史研究会が活発に活動している。これらの方々にも加わって頂

き、長崎や九州らしい支部として活動したいと願っている。

来年の全国大会を長崎で開催させて頂けることになった。いつもの6月開催を無理をお願いして5月に変更させて頂いた。6月になると長崎は雨がが多い。せっかく長崎へおいで頂いた会員各位に、「長崎は今日も雨だった」とごっかりして欲しくない為であることをご理解頂いてのことであった。支部では大会の開催に向けての準備に入った。大会に併せて長崎を、そして、長崎の異文化の交流を見て頂くための「オブショナル・ツアー」も企画している。ぜひご参加頂きたい。

テニスもゴルフも長崎で始まり、当然ながら日本で最初のテニスコートもゴルフ場も長崎に作られた。コビーを最初に飲んだ日本人は長崎の遊女であったそうであるし、日本で最初の西洋料理店も長崎にあった。長崎の「日本始めて物語」は多い。日本比較文化学会の大会としても「始めて」の試みをしたと考えるのが、現代「長崎人」の挑戦である。

乞ご期待。

(長崎ウエスレヤン短期大学教授)

第十四回大会(六月十三日、八戸工業大学)の最後を飾る講演は、日本体育史学会理事岩岡豊麻先生により行われた。本紙ではその時講演されたものを、先生には重ねてのお手数をお煩わすこととなりまして、改めて原稿用紙に御執筆頂き、それをここに掲載することと致しました。

(編集者・楠)

打毬の歴史は古く紀元前二十世紀、打毬戯の文書や遺物がエジプトで発掘されている。そして騎馬打毬は紀元前五世紀から六世紀にかけて古代ベルンシャ(現イラン)で発祥した。ここで発祥したこの打毬はササン朝ベルンシャ(紀元二二六年〜紀元六四二年)で復活されてから華々しい王者のスポーツとしてベルンシャ文化の進展と共に世界各地に伝播しその歴史が始まる。

我が国に直接関係のある中国には紀元三世紀頃、東西文化の交流路である「シルクロード」を通じて伝播された。この

国の騎馬打毬は唐、宋時代に入って皇帝自ら参加し宮廷の最も豪華な娯楽競技としてその黄金時代を迎える。中でも唐の玄宗(六二六〜七五七)は熱心で、打毬を文官登用試験の必修科目として採り入れ、この国家試験合格者と軍隊を試合させたり、打毬に熱中するあまり家臣から戒められたりする場合も少なくなかった。したがって、彼の打毬に関するエピソードは特に多い。

中国の打毬は「擊鞠」「擊毬」また後世馬球とも呼ばれたが、唐、宋時代は馬以外の騾や驢も用いられた場合は「小打」馬の場合は「大打」とも呼んだ。この時代西アジアは名馬の産地で、シルクロードの貿易路を通して運ばれるのは負ぎ物の馬であり、またこれと一緒に毬杖と毬であった。特に美しい箱に入った毬が再ばれ、やがて中国で毬杖が生産されても毬は依然として高価な輸入品であった。

この時代の打毬は、「打毬はもと軍中の戯なり。太宗、有司に令して、その儀を詳定す。三月大明殿に会鞠す。有司地を除いて木を立て、東西に毬門を造る。高さ丈余。首に金竜を刻み、下に石の蓮花の座を施し、加うるに采絹を以てす。左右に朋を分け、承旨の二人を以て門を守り、衛士の二人は小紅旗を持って毬を唱え、御竜宮は毬場を周衛す」(宗礼史)とある。毬を唱えるとは毬門に入った毬を数えることである。毬門は東西向い合せた門柱であることが判る。打毬の乗隊が族化の幟頭をつけて毬杖を持ち(乗史)蘇洵は毬杖製作で金がなくなると売って酒に替えた話もあり、この時代は宮廷以外の各地でも盛んに行われた。特に宮廷に仕える婦人達の打毬は豪華であった。

彼女達は花のベールを冠り、一方は赤の他方は緑の金縷の上衣を着、優美な帯をしめ、銀の靴に金銀をちりばめた豪華な鞍にまたがり、寶石で飾られた高価な馬具を付け、廷臣の持つ黄金の箱の中からとり出した刺繍の毬で打毬をしたのである。時には深夜に至るまで継続され美しく着飾った打毬乗隊が打毬案を奏し毬杖を手にした毬妓がそれに合わせて舞ったのである。獨台の光に映するこの光景はさながら宮廷最大の興をそなえるものであった。またこの国の打毬にわが国の打毬と最も関係の深いものに歩打毬がある。「乃ち御殿に廷臣を召し飲す。又歩擊者有り。騾驢に乗る有り。供奉者をして朋と戯れ令む」(礼志・宋史)。この歩打毬は挿丸と称し、唐時代の受験啼ぐ書生達の打毬の初歩的練習から端を発したものであるが、宋時代になると少年や婦人達の間で行われ、更に整備され近代ゴルフの原型ともなった。丸経によれば挿丸は「誠足以取其放心、養其血脈、而怡擇乎精神者矣、不以勇勝、不以力争、斯可以正己而諸身者也。由是觀之抑亦衛生之微奥而訓將練兵之一伎也。宜乎君子不器而衆樂之」とある。①人数一可分班、十至九数大会、八至七数為中会、六至五数為小会、四数以下無称。②場地一方面有内、四、堊、仰、阻、妨、迎、里、外及平的門林等。③一場内有定置球窩、毎日更改新窩、左旁立一彩旗。④球窩基平方不及一尺、必須在右。⑤窩與基可相隔一丈至數丈、遠者五六十步、但不得超過百步。とあるように近代ゴルフと全く共通していると言つてよい。

平成三年八月十三日付読売新聞の全国版に中国蘭州北西師範大学のリンホン・

リン教授(体育学)が従来定説となっていたゴルフ発祥が一四五七年スコットランドに於いてであることに中国では既に「球玩」という名称でこれを遊ることに五〇〇年前に行われていることを発表したこと、この世界各國の識者間に一大論争が生じたことが掲載されていた。筆者は二十数年前に「挿丸こそ近代ゴルフの原型であることを各種学会で発表し続けて来て居り、所謂東洋研究の未熟さに欧米諸國の学者に驚くと共に西洋史的歴史観のみに走る傾向を成しめたい気持ちで一杯である。さて、古代ベルンシャで発祥した「騎馬打毬」は最初「チョウガン」と呼ばれ「チョウ」は木製の叩き棒、「ガン」は叩く物という意味であった。それが十三世紀初め所謂「陸の道」を通じてこの「チョウガン」がイスラム文化と共に印度に伝播した。印度ではチベット語「ブル」(柳の根で作ったボールの意)と呼んだ。

十九世紀半ば当時英領インドであった時代の一八五九年、アッサムのイギリス茶栽培者達がマニプルでこの「ブル」を学び、ここに「ポロクラブ」を結成し、翌一八六〇年にカルカッタにもポロクラブが誕生するに至った。

このポロを見た駐インド第十騎兵隊(通称ベンガル騎兵隊)は一八六九年ロンドンでこのポロを初公開した。そして一八七一年第九騎兵隊とポロ対抗試合を行ったのである。この試合は両チーム八名宛出場して行われた。これが第一回ポロ大会である。現在もイギリスは勿論アメリカ、ドイツ、イタリア等に普及し、第四、七、八、十一回のオリンピック大会の正式種目として採用されると共に現在アルゼンチン、スペイン等ヨーロッパ、

打馬騎

大会講演・日本体育史学会

南北アメリカ、アフリカの諸国で行われている。

さて、我が国の打毬について述べよう。現在わが国では八戸市、山形市及び宮内庁の三ヶ所だけに存続されている。これ等の打毬は何れも江戸時代中期第八代將軍吉宗の時代に復興された打毬である。

わが国には七世紀から八世紀にかけて遣唐使等を通じて「蹴鞠」等と共に韓国を経て中国より移入された。移入当初の打毬は徒打毬で貴族階級の正月の年中行事として行われた。平安時代になると武士の台頭と共に馬術が発達し「騎射」と共に騎馬打毬となり主として武士階級の娯楽競技として五月の年中行事として定着した。鎌倉時代になると「流鏑馬」等懸「犬追物」等の実践的な新興武芸として発達し、娯楽性の高い騎馬打毬は消滅した。江戸時代中期、將軍吉宗は武上像を鎌倉時代初期の武芸に求め、更にオランダよりケーズルという新しい馬術の指導者を招くと共に馬匹を改良し大いに馬術を奨励した。騎馬打毬は流鏑馬や犬追物等の諸武芸と共に復興したのである。

現存する八戸打毬は復興当初の、山形は天保時代のそして宮内庁の打毬は弘化時代の各形式を継承しそれぞれ独特の伝統を守り、今日に伝える貴重な古式馬術である。

八戸の打毬は加賀美流附伝打毬と称され、八戸藩祖加賀美次郎遠光の創設した加賀美流馬術の騎射八道に加えられたものである。

服装は端なり笠に水色の素袍にたすきがけ鹿の皮で作った「むかばき」をつけ紺足袋に草履をはき、半月状の網のついた七尺五寸の毬杖を持ち、地上に並べてある一尺八寸廻りの四つのボールをすくいサッカー型のゴールに投げ入れる。色別は笠、たすきおよびボールの赤白によって判別してある。

山形と宮内庁の打毬は何れもバスケット型の穴に三尺〜三尺五寸の毬杖で直径一寸五分の六〜十二個の毬を投げ入れる。色別は陣笠、籠手、陣羽織りの赤白で判別している。わが国のこれ等の打毬の特徴は、一、毬杖は何れも半月状の網のついた竹製であること、二、毬は中芯に小石を入れ打撃を巻き赤白の和紙で包み仕上げであること、三、毬門は一方側に設けてあること、四、毬は四〜十二個の中最終の毬(宮内庁、山形は揚げ毬)のゴールによって勝敗を決定すること、五、競技の進行およびゴールは太鼓、鐘を用い、ゴール数の標示に吹流等を使用していることが上げられる。

対して鎌倉時代以前の打毬つまり王朝時代の打毬は「康保三年(九六六)六月七日弘徽殿において競馬の事あり(中略)左右の稚伎小童、騎馬にて南上し、一一馳せ下る。次の作物所に毬門を立て、打

毬童歩行して進み列び立つ。藤原朝臣毬子を投げ、総て十度石勝。左右の衆人勝に随って乱声を奏す。了りて退入す」(西宮記)とあり、毬門は東西向い合せ立てて居り争う毬も一箇であることが明瞭である。また、「大臣球を投げれば争い打つ、一番打つ間、二番左右兵衛を率い、陣前の球……」(同記)とあるように毬を打ったのである。

以上わが国に移入された王朝打毬、江戸時代中期復興されて現在も行われている打毬と、古代ベルシャに発祥した打毬およびインドに伝播されてロンドンで公開され世界各地に発展したポロについて論述した。更に騎馬打毬より派生した歩打毬が近代ゴルフの誕生に及ぶことも抄述した。結論的にまとめると騎馬打毬とポロの相違点を列記すれば次のようになるようである。

- 一、騎馬打毬は規定数(四〜十二個)の味方の毬の中、最後のボールのゴールによって勝敗を決定する。
- 二、騎馬打毬は網のついた毬杖でゴールにすくい投げてシュートする。
- 三、騎馬打毬のゴールは一方側に設けていること。

- 一、ポロは、一、一個のボールを互いに打ち合う競技であること、二、ゴールは左右向い合せて設けてあること、三、特に近代ポロには一回が七分三十秒で一競技八回のピリオドからなり各ピリオド間に三分間づつの休憩がある。

また、筆者も驚いたことにポロに用いるボールは依然として柳の根が今日使用されていること。そしてその大きさに至っては八戸の打毬の毬は直径に換算すると約九釐であり、ポロは三吋即ち八、三釐で

略同じであり、更に不思議なことに宮内庁、山形の打毬の毬は直径三〜四釐であるのに対してゴルフボールは四、二六釐で同様に殆ど同じ規格であることである。附記

今年山形の打毬は国民体育大会開催のため打毬騎士の大半が馬術競技出場のため騎士不足で止むなく少年による徒打毬が行われる。

また、八戸では、後継者育成のため馬術協会を創設し、加えて小学生による徒打毬が復活し、打毬存続に大章であることとを特に附記したい。

第十四回大会総会報告

一 報告

1 庶務報告

- A 「比較文化研究」発行について
No.17、No.20号を発行。なお、主な送付先は国立国会図書館、ハーバード大学のHARVARD-YENCHI NG LIBRARY、郵政省など。
- B 第十五回大会について
(1)開催校 ウェスレヤン短大・奥田学園。大会日は五月二十九日。
(長崎県諫早市)
- (2)シンポジウムのテーマ
「地域文化の衝撃―異文化との接触・交流そして融合―」に決定。

2 会計報告 別紙資料

二 議題

- 1 会則改定について
事務局次長の英語名をassistant secretaryとする。
- 2 入会申込書について
従来のもに「所属希望支部」欄

を設け、改定した。

3 第十六回大会について

(1)開催地 関東支部地区(予定)

(2)シンポジウムのテーマ(未定)

4 「比較文化研究」について

○発行時期については、年度末に片

寄るため、この解消をはかる。

○編集委員の芳賀馨、南條善治は引

地岳雄と交代。

○投稿規定を整備する。

○投稿者は原稿及びそのコピーをあ

わせて二部提出する。

5 「比較文化会報」

投稿者は左記に従い、ご応募下さ

い。

(1)近況報告

縦書 十八字×七行

(2)新刊書、編注書等の紹介

近況報告の場合と同じ。

(3)エッセイ投稿

縦書 十八字×三十行

(4)支部報告(支部活動など)

縦書 十八字×六十行

投稿ノ切日

一九九二年七月三十一日

投稿先

〒九六〇〇一一 福島市光が丘

一番地 福島県立医科大学 数学

講座 楠 純

芳賀馨著『現代アメリカ研究』(開文社

一九九二年)

本書は大学卒業後の四十年間に渡る英

米文学研究の成果である。「教師は自分

の研究業績をベースに教育を実践すべき

である」と言う著者の教育信条が、見事

に結実した論集になっている。

第一部小説論においては、S・アンダー

ソン、E・M・ヘミングウェイ、F・S・

フィッツジェラルド、カート・ヴォネガッ

トの作品が論ぜられ、第二部批評・翻訳・

比較文化論においては、神話と文学、太

宰治とD・キーン、ヘレン・ハンフが

論ぜられ、第三部ドラマ論では、E・オ

ニール、T・ウィリアムズ、A・ミラー、

パディ・チェイエフスキ、R・ローズ、

倉本聰、山田太一など、テレビドラマを

も含み、論じられている。

著者の若き時代から近年までの一つ一

つの論文は、幅と深さの発展史であり、

その時、その状況下で記された、思い出

の「自分史」でもある。

批評

山田 太一

シャーウッド・アンダーソンからカー

ト・ヴォネガットに至るまで、どこるか

TVドラマにまで目が届き、更に偏見な

く日本のTVドラマにまで言及されてい

る御本、他にないと思えました。ありが

とうございました。

パーティー

七月十八日、福島市内のえびすグラン

ドホテルで出版記念パーティーが開かれ

た。それには、南東北支部の例会に集う

会員と芳賀先生と日頃かかわり合いの深

い方々とが大勢参加し、楽しく和気あい

あいのパーティーであった。

《会長室だより》

・学術会議事務局から平成四年六月一日

現在で「学術研究団体調査票」が送ら

れてきた。現在は、本学会の連絡先が

東北学院大学教養学部芳賀研究室となっ

ているので、必要事項を記入して返答

した。そのコピーは各支部長宛郵送し

ているので必要な会員は各支部長に照

会のこと。本学会の沿革・現状の概況

がわかる。

・来年六月末日には、学術会議登録事務

が再度必要になるが、手続きは会長室

が担当する予定である。各方面のご協

力を要請する。使用する会員名簿は、

福島県立医大引地岳雄教授が責任編集

する「比較文化研究No.21」に掲載さ

れるので、各支部からの名簿訂正は早

急に同教授宛連絡されたい。(本部署

事務局に連絡のものは早急に同教授宛転

送される。現在会員名簿は、福医大引

地教授と本部佐藤幸正教授のコンピュータ

に入力されていて、両者は常時連絡

をとっている。)

・本学会は、日本放送芸術学会(会長・

上智大学佐多真徳教授)と協力して、

主としてアメリカにおけるテレビドラ

マ研究を続けている。その成果として

芳賀馨編「パティ・チェイエフスキ論

纂」(開文社)が既に出版されている。

両学会の会員に公募の形をとって「レ

ジナルド・ローズ論纂」および「アラ

ン・スローン論纂」の出版を企画中で

ある。希望者は直接芳賀まで連絡を願

いたい。(幾分の実費負担はやむを得

ないと考えている。)

・今後、学会内に全国の会員を網羅して

「特定研究部会」を組織し例えば前述

の「論纂」出版の様な運動を展開した

いと考えている。会員各位の積極的活

動を期待したい。(芳賀 馨)

時 一九九三年五月二十九日(日)

会場 長崎ウエスレヤン短大・奥田学

園(両校)

町一〇五七

長崎ウエスレヤン短大 南川研

究室 南川啓一(電話 〇九五

七二六二一・二三四。ファック

ス 〇九五七二二六二・〇六三三)

2 研究発表レジュメ

発表希望者は左記の要領で投稿して下

さい。

(1)三月三十一日必着で、上記南川啓一

研究室まで。

(2)ワープロ等にてB5版横書一枚にま

とめて下さい。その際左右の余白を

一センチ程度残して下さい。

3 シンポジウム レジュメ

各支部から選出された講師(各一名)

は、(1)及び(2)とも研究発表の場合の要

領で投稿して下さい。テーマ「地域文

化の衝撃―異文化との接触・交流そし

て融合―」

4 学会誌「比較文化研究」に論文掲載

希望者は本部署事務局または各支部編集

責任者に問い合わせして下さい。

5 学会紙「比較文化会報」に、近況報

告、支部活動報告、新刊紹介等で投稿

なさる方は左記の要領で願います。

(1) 縦書(一行十八字)

(2) 七月三十一日メ切

送先(問合せ) 〒九六〇〇一一

福島市光が丘一番地 福島県立医科

大学 数学講座 楠 純一

(電話) 〇二四五四八二二二一。

ファックス 〇二四五四八二三八